

Title	退渓と日本儒学 : 退渓学と山崎闇斎の影響関係についての一考察
Author(s)	張,源哲
Citation	懐徳堂研究. 2013, 4, p. 51-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26934
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

梁鎮

(サリ

ŕ

ンジン)へ

侵入した蛇梁之変の

事後対

策を通じて彼の対日観をみることができる。その事件は

退渓と日本儒学 退渓学と山 |崎闇 斎の影響関係についての一 考察

張源哲(チャン・ウォンチョル)

なかった。一五四四年四月、日本の船二十余隻が慶尚南理された見方を表わすまでは約十年を待たなければならあったに違いない。退渓が日本との関わりを具体的に整本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の対本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の対本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の対本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の対本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の対本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の対本人と対面したのである。その後退渓において朝鮮の本退渓の存在が日本に初めて知らされたのは恐朝鮮の李退渓の存在が日本に初めて知らされたのは恐

策を取ることを強く主張したのである。

を望む疏」という上疏文を出し、対日関係において宥和争のなかで一五四五年七月退渓は「倭使を絶たないこと丁未條約によって交易を再開することになるが、その論との交易関係を断絶するのか否かについて激論が行われとの交易関係を断絶するのか否かについて激論が行われとの交易関係を断絶するのか否かについて激論が行われとの交易関係を断絶するのか否かについて激論が行われとの交易関係を断絶するのか否かについて満にない。明鮮朝廷で甲辰年に起きたので甲辰之変とも称される。朝鮮朝廷で甲辰年に起きたので甲辰之変とも称される。朝鮮朝廷で

1

はじめに

職責にあった退渓がその上疏文を出した直後辞 廷の大半を占めていたが、 などによってすでに提起されたが、 意見を維持していた。宥和論は退渓以前申光漢や李彦迪 り日本との交易を再開すべきだという宥和論の少数 れた当論争では対日関係を断絶すべきだという意見が朝 一五四五年六月日本国王が送った密使によって触 退渓は対馬との正常化をは 当時: 弘文館 職 の典翰 た事 発さ 派 0

とがうかがわれる。実から、彼が当問題について非常に真剣に考えていたこ

退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、退渓は基本的にはその上疏文からも見られるように、

す₃ の事態を如 壊滅され を耐え忍ぶと西側が危険になり、 が辺境を侵す計画をたてる者がいるかも ているので、もしかすると暴悪無道な報復を企み我 しかも現在の我が国は北 もし南と北の てしまうかも知りません。 (何に解決できるか大変心配でござい 両夷狄が一度に侵入すると、 の匈奴とも不和 腹を守れば背中が 将来 我が国はそ 知れ が絡まっ ませ 東側 ま

日本における退渓学の受容の前史

2

先述したように対日に関する官僚としての退渓の見解先述したように対日に関する官僚としての退渓の見解と述したように対日本が文化的教養のある文明社会へ進むために選ぶ道について何らかの方向を提示したといえる。以後日本社会が文化的教養を体得する一つの方法として以後日本社会が文化的教養を体得する一つの方法として学を理解する方便として退渓の学問と思想を援用したと学を理解する方便として退渓の学問と思想を援用したと学を理解する方便として退渓の学問と思想を援用したと学を理解する方便として退渓の学問と思想を援用したと

長の役 ち退渓の上疏があってから45年後、 彼の弟子達によって具体化されていくのである。すなわ することになる。 らは使行期間中京都で三十才余りの若い日本僧侶と交遊 行に参加した金誠一と許筬は退渓の弟子であった。 日本の儒学の受容と展開において退渓という象徴 われる藤原惺窩であっ が起きた直前、 その若 日本に派遣され い僧侶は後日日 壬辰戦争(文禄 本朱子学の鼻祖 た最後の通 信使 性

:に惺窩と親しく交友した許筬は彼のために儒教と仏

ざるを得ない ことは

確かである

が、

その範囲

は限定的であったとい

わ

かったとも言われる。したがって惺窩は退渓の著書や思張した明末の異端的思想家であった林兆恩の影響も大き 陽明学も受け入れており、 惺 門下であった。 争の時、 の一契機にもなったのである。 窩はそれを契機に仏教から抜け出して儒学への転換し 想についてある程度理解していたし、 指摘されているように、 なったことは周知のとおりであるが、その姜沆も退溪の て日本儒学史に名を残す儒学者として登場することに のである。 窩 の学風は、 日本に連行されてきた姜沆と学問的交流を通じ のみならず以後日本儒学が進むべき方向 純粋な朱子学とは しかし日本最初の儒学者として登場した 惺窩の学問は朱子学だけでなく さらに儒仏道三教の統合を主 その後藤原惺窩は かけ離れ その影響を受けた ていた。 壬: 既に 辰戦 転 換 た

であったことにつ 尊主義 Ĺ 窩の門下に入ってからやがて幕府の文教の責任者と われ に傾いてい の文脈から考えれば、 る林 惺窩 羅 0))学問 l) たといえる。 Ш て批判 0 湯合、 ...が陸象山と陽明学に対 したことからも 惺 惺 それは彼が 窩から朱子学を伝授され 窩よりはるかに 惺 わ か して包容的 窩 た朱子学 る 0 門下に か

> 岐に渡ってい なかった。 日本の史学と文学をはじめ本草学・兵学・ 山は博学博識な学者であったし、彼の学問は中国・朝 最も多く読んだと評価されたことからもわかるように羅 評価される羅山 して活躍 しつつ、 江 戸 時代を通 の学風は 江 戸時代の儒教文化の基礎 じて朝鮮から伝来された書籍を 朱子学の範囲にとどまることは 神道学など多 を固 め たと

の異同について論じた「柴立子説」を書き渡した。

惺

学問に 命図説』 通信使一行のために作った次の詩句をみると退渓と彼 いても彼なりの意見をもつようになったのである。 史で起きた理気前後の問題や四端七情論を囲 響をある程度受けたことは当然である。 した。また、その一 の儒学として自分の学説を深化させるために 儒学の全般にかけて幅広い知識を追求した羅 .関する羅山の評価の一面をみることができる。 などを研究して一六五一年の跋文を付けて出 連の 過程を経て十六世紀 彼は退渓の 朝 も退渓 む論争に 鮮 Ш が 0 儒学 自分

労如圃隠 要須慰

[本に)

使節にきた圃

隠 0

労苦を慰め

は将来退渓とともに窮究しようとするよ

理与党退 渓 八将共窮

退 泛溪李氏 は群れから聳え立っているので

は 貴国の儒学の名声は皆が讃える。 退溪李氏抜群殊

退渓の学問的偉大性を述べている。羅山が退渓に対して使臣として来て大変苦労したことについて慰めたあと、朝鮮朱子学の飛鳥と評価される鄭夢周がかつて日本に貴国儒名世僉呼

如何に敬慕の念を抱いていたかがうかがえる。

必然的であったといえるだろう。

に退渓 は山崎闇斎の登場を待たなければならなかった。 11 も退渓 きよう。 学の基礎を固 学と密接な関連があった点で退渓との影響関係を想定で 以上 以降、 の影響は の四端七情論に限って関心を寄せた林羅山 でわかるように、 しかし儒学者として退渓の偉大性を評価 退渓の学問と思想の影響が本格的 めた惺窩と羅 非常に限定的であ 江戸時代 Ш の学問は両方とも朝 0 ったとい 日本儒学または朱子 わざるをえな に現 れるの 置しつつ 鮮 のよう 0 儒

山崎闇斎の思惟の展開3 退渓学の受容と

立した学者と評価される山崎闇斎が退渓を如何に敬慕周知のように修養主義的または、日本的な朱子学を確

闇斎の思想は個人の修養と厳格な行動規 ては阿部 である。 のである。そして当時 ることによって窮極的に日常の生活に適 述する一方、 れた通りである。 退渓 その点において二人の 吉雄 思想に如何に影響を受けた人物であっ 内省的省察を通じて個人の修養に の先駆的 退渓の学問は朱子の思想を徹 0 な研究以来、 他 の日 間 一本儒学者には見られ の影響関係は最初から 多くの 範を重 用しようとした 研 究で指 結び 底的 たに 視 したの つつけ な つ

立教し そ真の儒学であると主張したのである。 追求し 思想の探求を通じて人間が生きていく道を求める道学こ 元 に進んで朱子の著書を精密に研究することによって、 • 闇斎は羅山と同じように、朱子学の一 明以来の朱子に関する誤 た羅山 た原点に戻ることを強く主張 の学風を俗学であると批判しつつ、 った認識を正して、 した。 尊主 闇斎は博学を 義 からさら 朱子 朱子が

羅 闇斎 あ の収集した書籍によって退渓の著書に接したのである。 闇斎は当時土佐藩の家老であり儒学者であった野中兼山 Ш ŋ 朱子学の探求を通じて自分の思想的な観点を模索する が読まなかった 0) 思想的に共感した野中兼山は朝鮮朱子学に関心が 書に力を注 いだのである。 『李退渓文集』 Þ 闇斎はかつて惺窩 『自省録』 のよう

なったのである。

後代の大塚退野に至るまで多大な影響を及ぼすことに後代の大塚退野に至るまで多大な影響を及ぼすことに後代の大塚退野に至るまで多大な影響を及ぼすことになると評価した『朱子書節要』

纂した『白鹿洞学規集註』の序文からもうかがわれる。の実体が何であるかについては、彼が三十三才の時に編で退渓著作との出会いによって体感した感動の程度やそところで闇斎が自分の朱子学的思惟を完成させる過程

を理解することができた。」 を理解することができた。」 を理解することができた。」 を理解することができた。」 を理解することができた。」

解する者がいたとはまだ聞いていない。それは歳月の本が家で伝習されているが、その意味を十分に理「ところで嘆かわしいのは日本では『小学』・『大学』

発して興起しようと思う。」 接教えられたかのようであったので、私も須らく感後に生まれたにも関わらず白鹿洞書院で朱子から直後に生まれたにも関わらず白鹿洞書院で朱子から直の間隔が遠く、地理的に遠く離れていたためであろの間隔が遠く、地理的に遠く離れていたためであろ

深い内面的理解に至るようになったという。という点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴いたという点において朱子が継承した聖賢の学問の特徴にいる。

えられたので喜びを感じたのである。すなわち、闇斎は思った自分が退渓の著作との出会いで理解の可能性が与いても暗に批判している。しかし空間的な制限のため文いても暗に批判している。しかし空間的な制限のため文いても暗に批判している。しかし空間的な制限のため文いなかったといいつつ、惺窩と羅山の学問の問題点についなかったといいつつ、惺窩と羅山の学問の問題点についなかった。

発憤することになったというのである。

子と「洞遊面 専心専力で朱子の著作を読むならば、 書院で朱子の教えを直接受けるような境地」すなわち朱 自分も退渓のように現実的に朱子と遠く離れてい 「命」の世界に達することが出来ると悟り、 あたかも「白鹿洞 、るが、

が

とは然るべきことであっただろう。 援用し、 がって闇斎の学問的活動が主に退渓から習った方法論を 作を通してはじめて知ることになったのである。 という接近法が最も有効であったという事実を退渓 想の真義に達するためには文献の精読と深い内面的 ことに他ならない。要するに闇斎が朱子を学び、朱子思 は、 に精選・整理し、嘉点と称される訓点を付け刊行するこ 自体の可能性を退渓の自らの実践を通じて見せてくれた 以上から退渓の著作が闇斎に与えた最も大きな影響と 朱子から習う行為、 朱子の膨大な著作や語録を読み、主題と課題別 すなわち古典を読むという行為 した の著 理 解

おいて退渓は朱子と「洞遊面命」することによって、 読破したのは李退渓だけであり、また退渓の超人的な努 業績であることを強調したことである。 力の結果として出された『朱子書節要』こそ前人未踏の れるのは、 したがって闇斎が退渓を絶賛した例としてよく引用さ 膨大な『朱子文集』や『朱子語類』をすべて 要するに闇斎に

> を用いることによってそのような業績を成し遂げること い換えれば朱子文献の精読と内面的 できたことを強調しようとしたのである。 な理解という方法論

実に朝鮮第一の人物であった。」 にある。 『朱子書節要』 『退渓文集』全四十九巻を読みましたが は李退渓の 生の努力がすべてここ

子語 た¹⁹ ことは多いが、まだ退渓の 輯注されたが、それもまた思索したのが精密であ ものを見たことがない。 『朱子文集』と続集・別集全百二十一巻 類 百四十巻 (中略)、 (『朱子行状』 は退渓により 『朱子書節要』に比する 朱子の文書を抄出 (中略)、『朱 した

格が朱子を如何に理解するかにあったので、 の間 にはある程度の制限を付け加えなければならない。 であったと予想するのは に及ぼした退渓思想の影響は幅と深さにおい の方法論の意義は相当大きかったので、 闇斎の朱子学的な思惟の形成におい の影響関係が想定されても、 無理でもない。 彼らの学問の基本的性 て退渓の著作とそ しかしその推 彼の思想の 先述したよ ても絶対的 根底

ている通りである。

するかが最も重要な課題であったためである すでに提示したことであり、それを如何に祖述し 係はそれほど見当たらない。二人において全ては朱子が 斎が退渓思想を濾過なしに直接受け入れたような影響関 \bar{O} 範囲が主に方法論に集中された。そのため て継承 闇

ば闇斎朱子学の核心であるといわれる敬に関する理解に 開方式には相当な異質性が存在していたのである。 の形成に大きな影響を及ぼしたとしても二人の思想の展 おいても退渓のそれとは相当な差異が見られ たがって闇斎が退渓の著作に深く共感し、 る 彼の思 例え 想

てい 強においてまず主体としての心を確立させてから、 的に異なる。 が相即するところで心の主体性を確立すべきだと主張 を確立することであると説 心よりも敬身の されると理解されてきた。しかし闇斎はそれとは逆に 心が身を主宰すべきで、言いかえれば敬身が敬心に従属 心を絶えず覚醒させていく行為をいう。ところで敬の勉 物事との関わりにおいて主体性を喪失され 朱子学でいう敬について簡単に述べると、 敬に関する闇斎の独自的な理解は退渓とは根本 それに 側 面 0 要するに身を正しくするの 1 ては既に先行研究でよく指摘さ いたのである。 ない わゆる心身 主体が外部 が内心 ために その 敬

わっていることが分かる。

行動をより重んじて「敬心」はそれを達成するため 基づいてより一層強調する方向に進めたが、 然のことで、 斎はそれとは逆に倫理的行為の始発点になる身体 条件として、 退渓が敬の身体的な側面を内面の心を養う一つ 過程・手段として把握したのである。」 朱子の あるい は身体が心に服従することは 「心は身の主人」という命 一方闇

ために使われた敬の れば敬を守る目的が一身に揃えている五倫を明らか 散していく遠心的な思惟を志向したといえる。 考法を追求したが、 の関係に表れる倫理 退渓が主張した内面に向けて存在の内的構造を自覚する るためであるという闇斎の主張に示されているように、 退渓は全てを内面 勉強内容が、 闇斎は逆に外側の世界に向 の心 の構造を明らかにするためへと変 ^ 0) 吸 い上 闇斎に げ ていく求心的 おい ては他人と かって発 な思

周知のように退渓は身体の行動規範を主に教える『小学 例として、『小学』と『心経』に関する評価が挙げられる。 高く評価して、 おい 以上のように二人の思考法の隔たりを示すもう一つの て心の存在方式が主に論じられてい 初学者用の学習書としての『小学』より る『心境』を

る。 上の評価に関して次のような対立的な意見を提示していは『心境』を優先視している。しかし闇斎は、退渓の以

は褒めすぎたように思われる。」「程復心の「心学図」について、退渓は「答趙士敬書」に難いだろう」といった。私が考えるに退渓の賞賛し難いだろう」といった。私が考えるに退渓の賞賛し難いだろう」といった。私が考えるに退渓の賞賛しなめすぎたように思われる。」

距離を維持していたかを物語っている。 ている。 洛の主張を肯定的 究に対する疑問を提起したことを批判するともに、 同じように、 したとはいえない。 批判や疑問を隠したまま退渓の一言一句をそのまま遵守 し、その影響を大きく受けたことは事実であるが、 以 上 一の例でわかるように闇斎が誰よりも退渓を敬慕 次の言説は闇斎が退渓に対して如 明の儒学者であった韓苑洛が朱子の に評価した退渓の見解を闇斎は批判 先述した『心境』 の評価に関しても 何に 批判的な 治周易研 一方 韓苑

「私は思う、退渓の四爻・五爻の変に関する疑問が

細でないためである。」韓苑洛の見解と類似していることは退渓の考察が

関する様々な議論と葛藤の端緒を与える契機になる。 繋がれる。 影響関係は一直線上に連携せられるのではなく、重層的 れについての詳細な論述は省略する。 後闇斎学派に至り退渓に傾倒する肯定的態度は佐藤直 かつ複合的であったことを示唆している。 継承していることがうかがわれる。 では退渓学説の不備な点を分析的に批判する闇斎の態度 退渓を批判する否定的認識の態度は浅見絅斎に受け 退渓の影響を無条件に受け入れるのでなく批判的 方では退 その後崎門学派の内部で退渓の学説と影響に 淫 の方法論に影響されながらも、 それは退渓と闇 その結果、 他 0 斎

退渓学の批判的継承と変容様相

4

識人学者の間で退渓の著作が広く読まれたという事実成に大きな影響を与えたことがわかる。以後も日本の知日本儒学者の本格的な研究対象になり、日本朱子学の形よって断片的に読まれた退渓の著作はやがて闇齋に至りよって断片的に読まれた退渓の著作はやがて闇齋に至りた述したように、惺窩や羅山などの少数の儒学者に

維翰の紀行録である『海遊録』からも確認することがで雄、一七一九年朝鮮通信使一行の中で製述官であった申

える。 ねたのは 我が国の名賢達の文集の中で日本人が崇め立てるの 大坂に書籍が多いことは実に天下の壯觀であった。 いほどであった。」 何が好みであったか。」など一々記録するすべも 人があり、 『退渓集』に比するものはない。家ごとに習い覚 陶山書院はどの郡に属するのか、 日本の学者たちとの筆談においても彼らが尋 『退渓集』 何の官職についているか、 の文句であった。 先生の子孫は 質問のなかで 先生は生前

高く評価していたことを物語っている。

談を交わす場合、 ある。 渓集』 安直は陶山 の子孫の近況についての質問が慣例のようであったとい であったが、その中でも知識人社会では特に退渓と そのように当時日本では朝鮮書籍の出版と販売が盛 例えば申維翰との 従って日本の学者が朝鮮 に異様なほど関心が高かった事実に注 [書院について尋ねたのである。 当然 筆談を交わ 『退渓集』の内容や退渓およびそ 通 した日本の儒学者水足 信使一行を訪問 目すべきで 己して筆 退退 h

> 行われた点に注目される。 東に移ったという「道脈已東」の発言から朝鮮朱子学を として活躍していた筑前博多の儒官であった春菴の次の 目されるのは、 について相当知識を持っていたことと、 発言は当時日本の儒学者たちが朝鮮朱子学の展開と成 議論が行われた。特に両国の朱子学に関する論争が多く 交流に参加したので、両国の文化と学問に関する様 使行時期であった。当時日本の有名な文人や学者が多く ところで、 朝鮮と日本の儒学者の間での議 当時より早い時期、 例えば日本側 一七一一年の第八次 朱子学の学脈 の代表的な文人 論で最 が々な でも注

方へ移ったことが分かります。」 一部のでは、それによって濂洛の学脈がすでに東のいまり、それによって濂洛の学脈がすでに東のいまり、その人柄を知るようになりまいた。さらに彼らを引き継ぐ学者たちがいたこともがより一層深くなりました。その他、陽村、晦斎ながより一層深くなりました。その他、陽村、晦斎ながより一層深くなりました。その他、陽村、晦斎ながより一層深くなります。

た議論で最も注目されるのは日本儒学者の主張に朝鮮朱しかし当時、両国の学者の間で朱子学に関して行われ

る。日本の朱子学も朝鮮に劣らないほど学者と著書がある。日本の朱子学も朝鮮に劣らないほど学者と著書がある。日本の朱子学も朝鮮に劣らないほど学者と著書がある。

代表的な朱子学者であった三宅観瀾も退渓の学問 を議論 浅見絅斎から学問を習った朱子学者であった。 性について惜しみなく賞賛の論調で述べている。 者である三宅観 両 国 し、古今を推し量る人物として評価された当時の の対決意識を最も鮮明に表したのは 瀾であった。 彼は他ならぬ闇斎の弟子の 日 |本側 専ら経義 官的偉大 の儒学

近なところに進んだことはあってもすぐ本道に戻 分の学問を自慢することなく、 そして性命の微言や章句の序論が奥深く、 や治める功力を体認することがより切実になった。 確になった。また自ら仁の実行を教え、自己の克服 情を分弁して、さらに拡充、 すら朱氏を崇めたてていた。かつて私は彼 その後、 ・二冊を読んだことがある。それによると四端七 さらに素直に達する望みを窮究して、 遼東の東方に李退渓がいた。 抑制する方法が一層明 拙速で行うこともな 退渓はひた やがて卑 精密で自 の著書

り、礼を動かして義を実行するに至ったのである。」

たのである。 繰り返し提起して彼自身の隠れた意図を補強しようとし とを浮彫りにしようとする彼自身の裏面的意図を明確に 斎が相互影響なく対等な位置にある偉大な学者であるこ もかかわらず、 係や関連事実については全く言及しなかったのである。 は闇斎学問の源が退渓にあったという二人の間の影響関 絅斎へと受け継がれている退渓に対する批判的な論調を 表している。さらに、 く存在していることを指摘することによって、 る。その結果、 な学問的業績を成就した事実を重ねて強調したのであ かえって観瀾は退渓と闇斎が空間的に遠く離れていたに の真の儒学者として浮彫りにしようとした点である。 を受けた追従者ではなく、退渓と肩を並べるほどの日 面的な賞賛の論調とは異なり、 しかし三宅観瀾に注目すべきことは、 両国では二人の賢人の後を継ぐ学者が多 相互に照応するように朝鮮と日本で偉大 闇斎から自分の 山崎闇斎齋を退渓の影 師 匠であ 退渓に関する 退渓と闇 った浅見

を退渓と肩を並べるほどの真の儒学者として尊崇しよう識、すなわち退渓に対する批判的疑問の提起と山崎闇斎しかし観瀾の朝鮮朱子学に対する以上のような対決意

通 かったからである。 は闇斎をはじめ日本の朱子学についての知識 ることができる。 についての広博な知識とは対照的に、 とする試みは、 、状況について全く無知であった朝鮮側の状況を垣間見 信使の書記であった厳漢重の談話は、 い難い。それは日本の儒学者たちの朝鮮朱子学 最初の意図に比してそれほど成果をあげ 観瀾の論争相手として参加した朝鮮 朝鮮 当時日本朱子学 0 儒学者たち は殆どな

「仰せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「仰せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が「如せ思わく貴国の風俗が大きく変わって文教が

で終結してしまったのである。その状況について観瀾はは相互の認識の差と双方の知識の不均衡のため成果なしとして行われた両国の文人学者達の朱子学に関する論争要するに、一七一一年第八次朝鮮通信使の使行を契機

斎の影響関係はもちろん、

それ

を越えて朝鮮

、よ子学と目、退渓と闇

化とその展開様相につい

ての具体的

な究明は、

本朱子学の相対的特性を比較的に把握するためにも最も

のように自分の苦情を吐露している。

次

方に伝え願いするつもりです。」 て志趣を共にする者がいた事実を知らせたくて、 者たちに別の時代、 取り上げるの 私は我が 国 の文士 は、 晦斎と退渓の気風を習ってい 一の中で 別の国においても彼らと同 毎 度 Ш 崎 氏を代表とし ・る学

しかし当時両国の朱子学を囲んで十八世紀以後日本でついての論争も見られなくなる。たらない。それとともに退渓と闇斎の学問的な関連性にたらない。それとともに退渓と闇斎の学問的な関連性に行われた朱子学に関する議論が第八次使行以後には見当朝鮮通信使の使行を契機に両国の文人学者たちの間で

るだろう。 重要な学問的 課題であることを改めて認識する必要があ

5 結び

め 献の精読と内 容・発展させたのである。 継承したのではなく、徹底的に自分の方式をもって変 より重層的かつ複合的に接近する必要があるだろう。文 影響関係は単線的な分析視点で見つめるのではなく、 以上 敬思想の継承に至るまで闇斎は退渓思想を直線的に の議論に基づいて結論をいうならば、退渓と闇斎 .面的な理解という方法論上の課題をはじ

あった。 他人に対する倫理的関係へと変容させたことからもうか それを心性の内 的に内面的修養を展開したのである。 と窮理の二つの方法の中から居敬への焦点を合わ がある。 渓の敬思想を如何に変容・発展させたかを検討する必要 かるように、退渓を通して受容された日本の朱子学は 従って闇齋朱子学の中核といわれる敬思想にお の方向ではなく、 要するに退渓は朱子の修養論で展開される居敬 それは山 面 ・崎闇斎が退渓の敬哲学を受容しつつも の問題でなく、 社会的な実践の方向への発展で 五倫 の問題、 山崎闇斎からもわ すなわち せ徹底 V · て退

2

がわ 養が中心 樹立を指向する傾向があったといえる。 れる。 であった朝鮮の朱子学とは異なり、 闇斎をはじめ 日本朱子学の関心が、 個 人 0

ろうか。 は、 以上 朱子学の裏面を改めて吟味する必要があるのではない 学派運動が出現する主な背景として作用したのである。 朱子学はやがて朱子学を批判し、古学に戻ろうという古 日本朱子学のもう一つの姿であったのである。 向へと発展することになり、 このように日本朱子学の傾向は形而上学を否定する方 の文脈からみると反朱子学といわれる日本の古学 表面的には朱子学を批判したといっても裏面的 反形而上学的な傾向の 今後 日 É

注

- $\widehat{1}$ 李滉、『退溪集』、巻六、七-a、「甲辰乞勿絶倭使疏 民族文化推進會、 一九九〇、 影印本)、 頁一六九。
- 李滉、 安炳周、 有諸酋之桀驁 退溪學研究院、 『退溪集』、 「退溪の日本觀とその展開 切齒報復 一九八二) 前掲書。 而謀犯邊守者乎 「此国家已與 宨 『退溪學報』(ソウル、 設使南北 安知彼 二虜 中

3

乎 此臣之所大憂也 倶

發

則

樽

東而

西

掀

衛腹

而背潰

未識国家將何所恃而能辨此

時 朩

9

また、李珥の『撃蒙要訣』も一六五八年に飜刻・出版された。

- ○一)、頁一○三。
- (6) 林羅山、『林羅山文集』巻四○、「惺窩先生行狀」(東京:ペ(6) 林羅山、『林羅山文集』巻四○、「惺窩先生行狀」(東京:ペ

聞也 吾不幸雖落于日本 而遇斯人 亦大幸乎」斯人 俱談有日矣 沆曰 朝鮮国三百年以來 有如此人 吾未之「朝鮮刑部員外郎姜沆來在赤松氏家 沆見先生 而喜日本国有

- 慶尙大學校 南冥學研究所、二〇〇三)、第十五輯。(7)成海俊、「日本朱子學の傳來と受容」、『南冥學研究』(晋州:
- が一六六五年、『夙興夜寐箴』が一六六六年に出版されている。
 註』が一六四七年、『延平問答』が一六四七年、『朱子行狀』
 ・ が一六三三年、退溪の『聖學十圖』が一六五五年、『朱子行狀』が一六三三年、退溪の『聖學十圖』が一六五五年、『朱

- 大升 林羅山、『林羅山文集』巻十四、「寄朝鮮国副使姜弘重」(東京 日 也 也 發 が退溪と奇大升の四端七情論争を評する次の記録がある。 ペりかん社 一九七九、影印本)、 - 貴国先儒退溪李滉 專依程朱子說作四端七情分理氣辯而答奇 七情氣之發也 末學膚淺 理者氣之條理也 我曾見其答 未見其問 陰陽氣也 其意謂四端出於理 而不能答合一 氣者理之運用也 七情出於氣 是以思之 其分理氣 豈容喙于其間哉 則其弊至於支離歟 頁一五七 - 一五八。林羅山 而不擇善惡 此乃朱子所云四端理之 退溪辯尤可 則日 則其弊至於 合理 太極理 則
- 阿部吉雄、前掲書、頁一〇九から再引用

蕩莽歟 方寸之內 所當明辨也

大升所問果如何_

10

- (11) 阿部吉雄、前掲書
- 九六五) (12) 阿部吉雄、『日本朱子學と朝鮮』(東京:東京大學出版會、
- (13) 成海俊、前掲書、頁三二七参照
- 二〇〇六)、頁一八六。(14)田尻祐一郎、『山崎闇齋』(ソウル:成均館大學校 出版部
- (15) 『朱子書節要』は、一六五六年京都で飜刻・出版され、以後、
- 田尻祐一郎、前掲書、頁一八七から再引用。

詳矣 得是論 反復之 有以知此規之所以為規者」者鮮矣 嘉嘗表出掲諸齋 潛心玩索焉 近看李退溪自省録論之「夫規之明備如此 宜與小大之書並行 然隱於夫子文集之中 知

(17) 田尻祐一郎、前掲書 再引用

遊面命 則我亦可感發而興起云」 遠地去之由乎 雖然若退溪 生於朝鮮數百年之後 而無異於洞」 「且嘆我国小大之書 家傳人誦 而能明之者 蓋未聞其人 是世

24

(18) 田尻祐一郎、前掲書、頁一九二を再引用。

(19) 田尻祐一郎、前掲書。再引用

索尤精矣)」 出朱書者多焉 未見若退溪節要者(朱子行狀 退溪輯注 尤考出朱書者多焉 未見若退溪節要者(朱子行狀 退溪輯注 尤考

(20) 例えば、彼の年譜によると、六五歳頃闇齋が退溪を朱子以後

莊博文之富 朱門之後無有出其右者 其後特李退溪而已矣」「朱夫子之後知道者 薛文靖丘瓊山李退溪也 文靖見識之高 文

本思想史學會、二〇〇一)、第三輯、頁二一。 本思想史學會、二〇〇一)、第三輯、頁二一。

(22)田尻祐一郎、前掲書、頁二〇〇 再引用

所能攻破也 嘉謂李氏所稱 恐過矣」云 此是程隱翁 四五十年林下潛心所得 恐難以一朝率然立論「程復心心學圖 退溪尤稱賞之 答趙士敬書論之詳矣 其言

(23)田尻祐一郎、前掲書。頁二一〇 再引用

「嘉謂 退溪四爻五爻變之疑 與韓見相類者 考之不詳也臣,养一良,真才清,夏二一(平克月

態度を見ることができる。 態度を見ることができる。 態度を見ることができる。

(26) それについては、水足安直の『航海獻酬録』の記録がある。「大坂書籍之盛 實為天下壯觀 我国諸賢文集中 倭人之所尊尙人作何官 又問先生生時所嗜好 其言甚多 不可儘記」人作何官 又問先生生時所嗜好 其言甚多 不可儘記」人作何官 又問先生生時所嗜好 其言甚多 不可儘記」

等 尚有遺蹤耶」 ・ おいては、水足安直の『航海獻酬録』の記録がある。 でれについては、水足安直の『航海獻酬録』の記録がある。

一九九六)、頁一七三 - 一八一。 李慧淳、『朝鮮通信使の文學』(ソウル:梨花女子大學出版部

28 瀬尾維賢編、 七一二)、頁三七 『鷄林唱和集』巻十四、「謹問」(日本:松柏堂、

晦齋等諸先生 亦已見其書 僕嘗讀退溪先生書 可識濂洛學脉已東矣_ 知其爲粹美之眞儒 而知其爲人 敬服尤深 且聞爾後繼作不乏其 其他如陽村

29 原念齋、『先哲叢談』(東京:平凡社、 -二七五参照 一九九四)、頁二六八

30

三宅觀瀾 外、『七家唱和集』宅集、「送嚴書記序」(日本:刊

寫者未詳、一七一二)、頁一四。

功 循然窮其所到 情者 擴充制抑之方 因之益判 或指己為仁者 其後遼之東有退溪 李子專尚朱氏 嘗規所著一二 或辨四端七 因之彌切 而凡性命微言章句緒論 潛深縝密 終乃就卑反内 禮動而義行」 莫衒莫速 體認克治之

31 三宅觀瀾 書 外、 前掲書、 頁二二に載せられた嚴漢重、 一復觀瀾

可恨也 好學君子 為山崎氏 以足下所云論之 則盖亦淹貫墳典 探賾義理 仰惟貴邦從尚丕變 文教蔚興 宜其名儒輩出 而疆域既分 聲聞不逮 獨使異邦之人 不聞盛名 扶植斯道 眞可謂 而至 甚

32 三宅觀瀾 僕於我邦多士之中 使學晦齋退溪風者 前掲書、「與嚴書記副帖」、 每推山崎氏爲稱首 知異代殊域 亦未嘗無同調共趣之人」 頁一七。 意願託足下齎致此

> 韓国思想史學會、 一九九五)第七輯。

李基東、 「退溪學と日本の朱子學」、『韓国思想史學』(ソウル: